

## 「平成 29 年度 第 1 回高知県総合教育会議」

開催日 平成 29 年 6 月 21 日（水）14：00～16：00

場所 高知共済会館 3 階 「桜」

---

---

（司会）

それでは、定刻となりましたので、ただいまから、「平成 29 年度第 1 回高知県総合教育会議」を開会いたします。

私は、本年度も議事進行を務めさせていただきます、高知県総務部長の梶と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、今年度最初の総合教育会議となります。なお、中橋委員と、急遽、木村委員もご所用のためご欠席をされておりますことをご報告を申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、尾崎知事からご挨拶を申し上げます。

（尾崎知事）

本日は、大変ご多用のところ、この総合教育会議に皆様方お集まりをいただきまして誠にありがとうございます。本年度も、また、この総合教育会議の取組の中で教育大綱の取組について、しっかりと PDCA サイクルを回して、本県の教育改善に努めてまいりたいと考えているところでございます。本年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。

新たな大綱に基づいて、学習面、学力の向上という観点からは、「チーム学校」の取組は昨年度からスタートしたところではありますが、その取組がさらに本年度において本格化していくこととなっています。ただ、このチーム学校の取組を、いわゆる厳しい環境にある子どもたちへの対策という観点からも拡大を、この 29 年度からすることとなっています。これに基づいて、新たな対策が今、講じられようとしてきているところでございます。是非、学年にわたりまして学校が組織としての力を発揮して子どもたちを育ていける体制となっていくように、本年度その定着をしっかりと図ってまいりたいと考える次第です。

また、併せまして、高等学校の教育について、高等学校の教育に関しても、いわゆる D3 ゾーンにいる子どもたちを半減しようという目標を掲げてきているわけですが、残念ながらこれまでの間、そういう形での、いわゆる改善の傾向が見られていない状況にあります。これは、非常に深刻なことだと思っています。やはり高等学校の教育について、更なる対応の強化を図っていかないといけない。そういう観点でいけば、平成 29 年度からこの教育大綱においても、高等学校におけるプログラムを、子どもたちの進路の状況などに応じて改善する取組を行ったり、また、教科会を通じて先生方同士、OJT を働かせていこうではないかという取組などもスタートしていくこととなっているわけですが、その実行状況をしっかりと見てあげて、具体的な高校における様々な点における改善に具体

的につながっていくかどうかを見極めていくことも今年度非常に大きなテーマになるだろうと考えているところであります。

教育大綱に基づく取組も2年度目ということになります。是非、今年度におきましても、先生方とともにこの教育の改革の取組に努めさせていただきたいと考えておりますので、またよろしく願いいたします。

(司会)

ありがとうございました。それでは、議事にしたがって進めさせていただきます。

本日の議事は、お手元の次第のとおり、(1) から (4) ございまして、まず、(1)、(2) について、それぞれご説明をさせていただきます、(3) で大津中学校、越知町教育委員会のヒアリングをさせていただきますが、(3) については、それぞれでヒアリング後、質疑応答、意見交換を行っていただき、最後の(4)の協議のところ全体についてのご協議をお願いするという形で進めさせていただきたいと考えております。

それでは、(1)「平成29年度施策の進捗状況等」につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

(事務局)

教育政策課でございます。

私からは、本年度の当初における教育大綱に基づく施策の進捗状況などについて、ご報告を申し上げます。

まずは、資料の1をご覧ください。資料の1は教育大綱で設定をいたしました基本目標の状況について、前回会議からの更新点に絞ってご報告を申し上げます。

資料1の2ページ目をご覧ください。資料上段の高校生の学力定着把握検査の結果につきまして、平成29年度の3年生の結果が新たに明らかになったところでございます。ただ、結果をご覧くださいますと、教育大綱の基本目標として15%まで引き下げることを目指しております、いわゆるD3層の生徒の割合につきまして29.8%となっており、引き続き3割近い生徒がD3層に位置しているという厳しい状況が続いているところでございます。

続きまして、資料の2をご覧ください。資料の2は、教育大綱に基づく取組が本年度で2年目となっておりますところでございますけれども、本年度更に教育大綱に掲げた基本目標や取組の方向性などが、県内の全ての学校などの現場に浸透し徹底される必要があるという認識の下、そのための方策につきましてイメージとして表したものとなっております。上段の幼稚園・保育所等につきましては、昨年度作成をいたしました高知県教育・保育の質向上ガイドラインの活用を各園に促していくことにより、また、中段の市町村立学校につきましては、全学校において作成をすることとしております学校経営計画において、具体的に教育大綱の取組の方向性なども連動いたしました項目設定をしながら徹底を図ることにより、また、下段の県立学校につきましては、各学校の生徒の実状を踏まえながら、

全ての学校において作成をする学校経営構想図と年間指導計画の徹底を図ることにより、教育大綱に基づく取組を各学校などの現場の実践へとつなげていくことを考えております。

次に、平成 29 年度当初における個別の施策の進捗状況等の説明に移らせていただきたいと思っておりますけれども、資料の 4-1、4-2 の A3 の分冊で用意しておりますものが、施策の進捗状況等をまとめた最も詳細なものとなっております。本日は、時間の都合上、そのうち、昨年度行いました教育大綱の改訂のポイントに関連する部分のみを抜き出しました、資料 3 の概要版を用いまして説明をさせていただければと思います。

それでは、資料 3 の 1 ページ目をご覧ください。1 つ目の改訂のポイント、「教員同士が学び合う仕組みの強化」についてであります。そのうち 3 つ目、小規模の中学校における教員同士の学び合いの強化に関するこれまでの取組の状況といたしましては、まず、近隣の小規模の中学校の教員が連携をして教科指導力の向上を図るネットワークを、東部、中部、西部の各地区において構築することを行ったところでございます。また、小規模の中学校の中において、日常的に授業について協議し合う仕組みの構築に向けましては、県内 11 校を指定し、研究を開始したところでございます。これらに関する課題といたしましては、小規模の中学校の中における学び合いにつきましては、まだ内容が十分なものとなっているとは言えず、今後、指導主事等による指導・助言を行っていくとともに、好事例を連絡協議会等で紹介していくこととしております。

2 ページ目をごらんください。2 つ目の改訂のポイント、「若年教員の資質・指導力の向上」についてでございます。そのうち 1 つ目、若年教員及び配置校への指導・助言等を行う体制の強化に関するこれまでの取組状況といたしましては、今年度新たに若年教員育成アドバイザーを東部、中部、西部の各教育事務所に配置し、全ての小・中学校初任者、特に、新卒の初任者につきましては、年間 5 回程度の訪問指導・支援を行うこととしておりまして、今月末現在で計 44 回行っているところでございます。これに関する課題といたしましては、若年教員育成アドバイザーの教育事務所への配置が本年度初めてであったこともありまして、年度当初は十分に訪問を行うことができなかったということがございますけれども、今後、今年度の訪問を軌道に乗せるとともに、次年度に向けましては本年度中にできるだけの準備を整えておくこととしております。

3 ページ目をご覧ください。3 つ目の改訂のポイント、「教員の多忙化解消による子どもに向き合う時間の確保」についてでございます。そのうち 3 つ目、望ましい運動部活動の運営についての周知・徹底などに関するこれまでの取組状況といたしましては、昨年度中に「週当たり少なくとも 1 日以上以上の休養日の設定」、「平日 2～3 時間程度以内を目安とした練習時間」、「外部指導者の積極的な活用」といった方針を各市町村、県立学校宛てに示したところであり、このことにつきまして、今年度に入ってから各種の機会を捉えて周知を図っているところでございます。これに関する課題といたしましては、望ましい部活動の在り方を県内あまねく徹底していくためには、併せて運動部活動の具体的な活動実態について詳細に把握をした上で取組を進める必要があるということと認識をしております。

て、これにつきましては、既に着手もしておるところでございますけれども、高等学校の運動部活動の実態調査を進めるなどとしております。

5 ページ目をご覧ください。4 つ目の改訂のポイント、「高等学校における多様な生徒の社会的自立の支援」についてでございます。この基礎的な学力や社会性を身につけさせることができる教育プログラムの実践に関するこれまでの取組状況といたしましては、昨年度末より各学校において、「社会的自立のための進路支援プログラム」に基づく年間計画の策定と実践に取り組んでいるところであり、具体的には各学校において習熟度別授業や少人数授業での学び直し、学習記録ノートの活用といった取組を適切に組み合わせながら取組を進めているところでございます。これに関する課題といたしましては、提出された計画だけでは各学校における細かな進行状況や課題等が必ずしも十分には確認できないといったことを認識してございまして、今後、指導主事による学校訪問において詳細の状況の把握、指導・助言を行うとともに、各学校における進捗管理を徹底することを考えております。

6 ページ目をご覧ください。5 つ目の改訂のポイント、「放課後等における学習支援の強化」についてでございます。そのうち 1 つ目、学習支援ができる人材の確保に向けた取組に関するこれまでの取組状況といたしましては、地域人材の登録・マッチングを行うための県の委託事業として設置をしております、学び場人材バンクを活用したマッチングでありますとか、県内 4 大学を構成員といたします、「教師教育コンソーシアム」に対して大学生の派遣を依頼するなどの取組を行っているところでございます。これに関する課題といたしましては、学び場人材バンクにつきましては、就労可能な人材のストックが十分でない状況も見られるところであり、これにつきましては、学び場人材バンクに対しまして学習支援の可能な人材の増員（発掘）とマッチングを要請していくこととしております。また、大学生の活用につきましては、特に中山間地域の学校について通勤等の問題から勤務が難しいケースもあるところございまして、長期休業期間中における集中的な大学生の派遣について、「教師教育コンソーシアム」などと調整を進めていくこととしております。

7 ページ目をご覧ください。6 つ目の改訂のポイント、「チーム学校による生徒指導上の諸問題への対応」についてでございます。そのうち 1 つ目、生徒指導上の課題の早期把握と組織的な対応の徹底に関するこれまでの取組状況といたしましては、校内支援会及び学年部会を中心とした組織的な対応の徹底につきまして、各校長会などにおきまして周知をいたしますとともに、リーフレットを作成して全教職員に配付するなどの取組をしているところでございます。これに関する課題といたしましては、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの勤務日数が少ない学校におきましては、校内支援会の開催日と勤務日を合わせることに困難との現場からの意見もございまして、更に配置の拡充に向けた要望を継続していく必要があるといったことでありますとか、また、数の充実に伴いまして、勤務経験の少ないスクールカウンセラー等が増えてきているところであり、これにつきましては、スクールカウンセラー等を対象とした研修会を引き続き充実するなど、人

材の育成を図っていくこととしております。

8 ページ目をご覧ください。7 つ目の改訂のポイント、「保護者に対する支援の充実」についてであります。そのうち 4 つ目、保育所・幼稚園等を中心とした、保育者、地域の子育て経験者、子育て世帯等の交流の場づくりの推進に関するこれまでの取組状況といたしましては、そのような機能を持つ多機能型保育事業所を今年度 15 カ所設置すべく、各保育所や市町村との協議を重ねているところでございます。これに関する課題といたしましては、事業実施に当たっては、外部の人材を地域連携コーディネーターとして配置をすることが求められているところでございますが、この人材の確保が難しいということがあり、今後、コーディネーターの配置につきまして調整を行い、事業の実施につなげられるよう支援していくこととしております。

9 ページ目をご覧ください。8 つ目の改訂のポイント、「地域との連携・協働の深化」についてでございます。そのうち 2 つ目、地域学校協働本部への展開に関するこれまでの取組状況といたしましては、高知県における「地域学校協働本部」の要件として、1 つには、充実した学校支援活動が実施されていること。2 つ目としては、学校と地域との定期的な協議の場が確保されていること。3 つ目としては、民生・児童委員の参画による見守り体制の強化が図られていることといったことを設定いたしまして、県内 7 つの学区をモデルといたしまして取組を進めているところでございます。これに関する課題といたしましては、モデル校における「地域学校協働本部」への転換に向けた取組を推進するためには、各校ごとに異なる特色や地域の関係性・実情等を踏まえたサポートが必要になることと認識をしております。今後更にきめ細かな支援を行っていくこととしております。

10 ページ目をご覧ください。9 つ目の改訂のポイント、「幼児教育の充実の加速化」についてでございます。そのうち 1 つ目、「高知県教育・保育の質向上ガイドライン」の周知・徹底に関するこれまでの取組状況といたしましては、4 月に県内 5 会場においてガイドラインの説明会を開催するとともに、教育センターにおける研修を通じて各キャリア段階にある保育者に対して説明を行ったほか、指導主事やアドバイザー等による訪問支援の一環としての周知にも務めているところでございます。これに関する課題といたしましては、ガイドラインの趣旨を理解し、資質・指導力の向上を実感できる活用に結び付けるためには、全ての保育者の理解を深め、各園の実態に合わせた実施につなげていくことが必要であるということと認識をしております。各保育所・幼稚園等に対して幼保推進協議会を通じて周知を図るとともに、取組の弱い園については個別に研修支援を行っていくこととしております。

11 ページ目をご覧ください。10 個目の改訂のポイント、「スポーツ競技力の向上」についてでございます。そのうち 1 つ目、スポーツ強化校の指定と重点的な支援の実施に関するこれまでの取組状況といたしましては、今月、東・中・西部の各地域の拠点となる運動部活動強化、拠点校として 4 校、優秀な実績を有する部のある強化推進校 A といたしまして 3 つの部、地域の特色をいかした活動を行う部のある強化推進校 B として 6 つの部を指

定したところでございます。これに関する課題といたしましては、強化校の指定によってどのように学校の取組が変容したかなどを含めまして、きめ細かい進捗の管理が必要になるものと認識をしております。指定校・スポーツ課・保健体育課等を構成員とする連絡協議会の開催による進捗状況の管理でありますとか、指導主事の定期的な訪問を計画的に行うこととしております。

私からの説明は、以上でございます。

(司会)

ありがとうございました。

続きまして、議事の(2)「高知県子どもの生活実態調査」結果の概要につきまして、児童家庭課から説明をお願いします。

(事務局)

児童家庭課でございます。

児童家庭課の方からは、昨年実施いたしました、子どもの生活実態調査の結果の概要、こちらについてご説明させていただきます。

資料の5をお願いいたします。一番初めの表の1ページには、今回の調査の概要をまとめております。調査内容につきましては2に記載のとおりでございます。対象者につきましては3に記載しておりますとおり、通信制の高校と特別支援学校の1校を除く全ての小・中学校、高校を対象といたしまして、小学校1年生は保護者に、また、小学校5年、中学2年、高校2年は子どもと保護者両方にお答えをいただいたものでございまして、4にございますように各学校で子どもを通じて各世帯に調査票を配布し、学校への提出又は郵送という形での回収をしております。また、6、7にありますように、全体では1万4,539のサンプルを回収し、回収率は61.2%。有効回答率は、一番低い高校2年生の子どもでも97.6%という形になっています。あと、最後の端のところでございますけれど、今回の調査では回答頂いた世帯の所得収入の状況から生活困難世帯、こちらの方の率を計算しておりますけれど、未回収とか無回答、こちらの方の世帯の分による下振れとか上振れ、そういった可能性がどの程度あるかというのを参考値として見るために、小・中学校児童に対する就学援助率、こちらの方で今回の調査結果と公表されている実測値とを比較しております。実測値は、平成26年度のもので少し古いですが、今回の調査結果は実測値よりも7%ほど低くなっております。

次の2ページ、3ページ、こちらの方は今回の調査結果の概要の一覧でございます。今回の結果につきましては、2ページの冒頭に記載しておりますように、市町村ごと、また年齢、学年ごとの回収率を勘案した、いわゆる統計処理、こちらの方を実施する前の単純集計となっております。こうした要素を反映した結果につきましては今年度改めて実施いたします詳細分析、こちらの方で実施することとしております。また、今年度は、設問間での

クロス分析でありますとか、生活困難世帯とそうでない世帯とのより詳細な比較、そういったものも実施することとしております。

4 ページをお願いします。主なもののみをご説明をさせていただきます。まず、子どもの所有物の状況では、子ども部屋、自分の部屋がないとの回答が、「ほしい」「ほしくない」を合わせて、下のところの計のところでございますけど、全体で 18.7%となっておりまして、下段のお小遣いのところの設問では、高校 2 年生で月 5,000 円ほどのお金がないと答えた者が全体の 3 割で、2 割強の子どもが「ほしい」というふうな回答を頂いております。

また、右の 5 ページでは、悩みごとを相談できる友達が 1 人もいないとの回答が、年齢が上がるごとに一定減少はしておりますけれど、全体で 12.3%という形になっております。また、夕食を一緒に食べる人についての質問では、「一人で食べる」との回答が学年が上がるごとに増えておりますけれど、中 2 で 1 割を超え、高 2 では 2 割近くという形になっております。

次、おめくりいただきまして 6 ページ。こちら方では、放課後一人で過ごすとの回答が、全体で 8.8%。また、放課後にほっとできる居場所はないというような回答が、同じく全体で 4.5%という形になっております。

右の 7 ページ。こちらの方では学校の授業の理解度。こちらの方でございますけれども、学年が上がるごとに低くなっておりまして、中段の勉強が分からないときに教えてもらう人がいない、また、下段の授業以外に勉強しないとの回答につきましては、学年が上がるごとに割合が高くなっております。授業以外で勉強しないとの回答につきましては、中 2 のところから高 2 のところから大幅に増加しているようなところが見てとれます。

次、おめくりいただきまして 8 ページでございますが、こちらの方、進学についてでございます。希望と実際に行くことになりそうな進学先をそれぞれお聞きしておりますけれど、約 5 割の子どもが大学以上に進学を希望する一方で、予想進学先、こちらの方では高校までの進学との回答が希望に比べて増え、大学以上に進学する回答が減っております。それで、進学先を経済的な理由によると答えた方に対しまして、希望どおりに進学を考えられる場合はどういった場合ですかというのをお聞きしたところ、右の上の上段にありますように、奨学金の利用、こちらの方を挙げている方が約 7 割。給付型奨学金については 4 割弱という形になっております。

次の 10 ページ、おめくりいただけますでしょうか。こちらの方では、子どもさんの方に「幸福度」、「自己肯定感」、「抑うつ傾向」、こちらの方の調査を実施しております、こちらの結果でございます。いずれの項目も学年が上がるごとに数字が悪化して良くない、悪くなっているのが見てとれます。

次、11 ページからが保護者の状況でございます。まず、経済的状況では学年が上がるにつれまして、「やや苦しい」、「大変苦しい」、こういった回答の合計の割合が増えまして、全体では 2 割近くとなっております。次の世帯収入、こちらのほうでは 300 万円未満の割合が全体で 18.7%。有効回答のみで見ますと 23.8%という形になっております。

その下の 11 ページの下から 13 ページにかけては、子どもとの関わり方をまとめてお聞きしております。勉強を見るでありますとか、子どもと一緒に遊ぶとか、そういったものを聞いておりますけど、こちらのほうにつきましては、「めったにない」という回答が中 2 から大幅に増加しております、13 ページのところ、一番上のところでございますけど、子どもの可能性を期待するかというご質問でございましたけど、こちらのほうについては「期待していない」との回答が各学年とも一定数は存在しているというところが見てとれます。

また、13 ページの中段から 16 ページにかけては、子どもへの虐待の状況をお聞きしております。9 つの質問にお答えいただいたもので、「よくある」から「たまにある」までの合計の割合が高い順に「大声でしかる」、「からだを平手等でたたく」、「子どもの前で大げんかをする」となっております。14 ページの上段にあります、「拳などでなぐる」につきましては、全体割合は少ないものの、各学年に「よくある」との回答があり、特に小 1 の方では多くなっております。

続きまして、16 ページと 17 ページでございます。こちらの方につきましては、保護者の方に子どもの進学について、希望の進学先、また、現実的な進学の予想、予想した理由、経済的な理由による場合には希望をかなえる条件、こういったものをお聞きしております。約 5 割の保護者が大学以上への進学を希望される一方で、高 2 の保護者では予想が希望と比べて「高校まで」は増え、「大学以上」は減となっております。8 ページでご説明をいたしました、子どもの回答と比較をいたしますと、予想と希望の乖離の幅が大きくなっております。また、進学予想を経済的な理由とした回答が 22.5%となっておりまして、そのうち希望どおりの進学を考える場合をお聞きしたところ、右の 17 ページ上段にあります、奨学金の利用を挙げる者が約 9 割、給付型奨学金につきましては 5 割弱という形になっております。

次の、支援制度、こちらの方の利用等につきましては、後ほど県の取組でもご説明させていただきます「子ども食堂」や、学校及び学校帰りの補習授業で、「利用の仕方が分からない」、「制度等について知らない」、「身近に制度等がない」といった回答が 2 割前後ある一方で、制度への興味は 18 ページの下端の方でございますけれども、こちらの方で、子ども食堂につきましても 1 割弱、学校の補充学習で約 4 割、学校以外の補充学習で約 2 割で、保護者が興味を示されております。

右の 19 ページでは、子どもに医療機関を受診させなかった経験が全体で 13.9%あり、「公的保険の未加入」、「自己負担金の支払いが困難」を理由とするのが合計で 4.6%。保護者の「多忙で連れていく時間がない」との回答が約 2 割となっております。

20 ページをお願いします。こちらの方、今回の調査では、生活困難世帯という項目を、まず 1 つ目は①といたしまして、世帯の所得の状況。②といたしまして、子どもにとっての生活必需品の所有状況。最後、③といたしまして、ライフラインの支払い困難の経験。こちらの 3 つの指標により整理をいたしております。



まず、所得につきましては、等価世帯所得 135.3 万円未満、こちらの方を生活困難世帯としております。これは、「平成 27 年国民生活基礎調査」から算出されます、税引等前の当初所得をベースとして定めたものでございまして、国が基準としています、手取り等による等価可処分所得での算出とは異なりますため、国が公表しております子どもの相対的貧困率 16.3%、こちらの方とは直接的には比較はできませんので、その点はご了承いただきたいと思っております。

次の、子どもにとっての生活必需品。こちらの方につきましては、中段に記載の 15 項目、高 2 については 12 項目、この項目のうち、経済的理由により「いずれかがない」との回答があった場合に生活困難世帯としております。

また、ライフラインの支払い困難経験につきましては、下段に記載の 13 項目のうち、経済的理由により過去 1 年間で「いずれかが支払いできなかった」「買えなかった」、そういった場合に生活困難世帯としております。

結果を整理したものが、右の 21 ページでございます。有効回答中の生活困難世帯の割合は所得の状況では 17.2%、生活必需品の非所有では 29.6%、ライフラインの支払い困難経験では 14.2%となっております、3 つの指標のいずれかに該当する生活困難世帯の割合は 33.6%となっております。

22 ページをお願いいたします。ここから最終ページまでが、生活困難世帯と非生活困難世帯とのクロス分析を学年ごとに行った結果でございます。22 ページにあります将来の夢、こちらのほうについては有意な違いは認められておりません。

23 ページ中段の、レジリエンス（逆境を乗り越える力）。こちらの方につきましては、「DESSA スコア」、こちらの方でレジリエンスが強くないと判断がされる上位 10%の率を比較いたしますと、生活困難世帯は非生活困難世帯の約 2 倍となっております割合が高くなっております。

26 ページの下段の、授業の理解度。こちらの方につきましては、「いつもわかる」「だいたいわかる」、こちらの方の合計は非生活困難世帯の方が高く、27 ページ上段の中 2 では、生活困難世帯と非生活困難世帯の乖離が 13.4 ポイントと、他の学年と比べて一番大きくなっております。

次の 28 ページでは、勉強を教えてもらう人として、「塾や習い事の先生」と答えた者に生活困難世帯と非生活困難世帯とで開きが出ておりまして、生活困難世帯は少なくなっております。

最後、29 ページと 30 ページをお願いいたします。進学先希望では、中 2、高 2 とともに高校までとする割合が、生活困難世帯は非生活困難世帯の約倍、約 10 ポイント高く、逆に大学以上とする割合は非生活困難世帯が 5 ないし 6 割であるのに対しまして、生活困難世帯は 4 割弱に留まっており、約 20 ポイント程度低くなっております。希望を抱く段階から大きな差が出ていることが伺えるものと思っております。

以上が、子どもの生活実態調査の結果の概要でございます。

続きまして、資料の6をお願いいたします。県で進めております、「子ども食堂」の取組を少しご説明をさせていただきます。子どもたちに無償又は低額で食事を提供いたします「子ども食堂」には、食事の提供を通じまして、そこに集う『子どもや保護者の新たな居場所』となるとともに、『保護者の孤立感や負担感を軽減する場』、また、『地域で子どもたちを見守る場』としての大きな機能が期待されております。このため、県では今年度から、県内の小学校区単位に1カ所以上の設置を目指しまして、「子ども食堂」の開設の検討・立ち上げの段階から、子ども食堂を継続し内容を充実させていくまで、県社協さんを初め、市町村、市町村社協等と連携を図りながら、各ステージに応じた伴走型の支援を積極的に行っていくこととしています。

具体には、この中段の左にあります、検討・立ち上げ段階での支援では、運営のノウハウや気を付けていただきたいことなどをまとめました、開設手引書、こちらの方を作成いたしますとか、開設準備講座も県内3カ所で開催することとしております。また、右にあります活動の継続・充実に向けましては、子ども食堂実施団体や関係機関が集まり、課題の共有、解決策を話し合ったり、情報交換を行うネットワーク会議、こちらの方を開催いたしますほか、真に支援が必要な子どもや家庭を子ども食堂につないでいただくため、民生・児童委員やスクールソーシャルワーカーなどを対象とした研修会も開催することとしています。併せまして、子ども食堂の機能を十分に発揮されるためには、真に支援が必要な子どもや家庭が子ども食堂につながることで、また、子ども食堂で新たに見つけられた、こうした子どもや家庭が学校や支援機関につながることで、この双方向の体制・仕組みを機能させる必要がございますので、そのために必要不可欠な学校との連携、また、良好な関係づくり、こちらの方も進めてまいりたいと考えています。また、下にありますように子ども食堂の取組に賛同いただける方々からのご寄附も募り、子どもたちを社会全体で支える機運の醸成も図ってまいります。

続きまして、2ページをお願いいたします。県内での子ども食堂の開設状況を地図に落としたものでございます。右下の方にありますように、開催頻度はまちまちではございますけれど、6月16日現在で8市4町、26カ所で子ども食堂が実施されております。昨年の10月頃には、10カ所程度でございましたので、着実に開設が広がってきているものと考えております。また、集落活動センターやあったかふれあいセンターの場所を利用した開催でありますとか、生協さんのご協力をいただいているもの、また、有料老人ホームの施設を無償提供していただいているものなど、開催場所、こちらの方は様々でございますし、また、内容につきましても学習支援をセットで行ったり、様々な体験活動を取り入れているものなど、内容も様々なものとなっております。また、子ども食堂とは別に、点線の囲みのところで、高知市のところから下に引っ張っておりますけれど、地域の民生委員・児童委員さんなどが主体となりまして、学校の調理教室、こちらのほうを利用いたしまして実施しております「朝食運動」、こちらの方の取組も現在4校にまで広がっている状況でございます。

簡単でございますが、以上でございます。

(司会)

ありがとうございました。

先ほどの説明、ただいまの説明についてのご質問、ご意見は後ほど協議の時間を取らせていただきたいと思います。

続きまして、学校からのヒアリングに入らせていただきたいと思います。

本日は、高知市立大津中学校・宮川幸人校長、森田やよい教諭と、越知町教育委員会・山中弘孝教育長、越知町立越知中学校・吉岡美佐教頭をお招きしております。

それでは、まず、学力向上に向けた教員同士の学び合いについて、高知市立大津中学校宮川校長、森田教諭、お願いいたします。

(森田教諭)

大津中学校研究主任の森田と申します。

最初に、私から、本校の研究の様子について説明をさせていただきたいと思います。資料につきましては、お手元に資料 7-1 として今から示しますパワーポイントの資料を配付していただいておりますので、そちらのほうと併せてご覧いただけたらと思います。

本校は、生徒が主体的に行動し、仲間と協力して未知の社会を切り開く力を身に付けることを目指し、学校教育目標を「自主・協力・創造」としております。具体的には、「めざす生徒像」として、夢や目標に向けて努力できる生徒、思いやりの心を持つ生徒、社会貢献できる生徒、基本的な生活習慣が身に付いている生徒の育成を目指し、取組を進めています。本年度も 4 月、そして職員会で学校長から、学校経営ビジョンについてプレゼンテーションを行い、目指す方向性を全教員で確認して進めているところです。

「研究のあゆみ」としましては、平成 20 年度から県学力向上指定校として、教育委員会の訪問を受けながら授業づくり、また組織的な校内研究ということを進めてまいりました。時には校内研修の中で考案を頂いたり、また授業の際には指導検討にも入っていただいて、目指す授業づくりということを全体で共有して進むことができたように思います。

そして、更なる「チーム学校」としての組織力強化、また常々、学校長の申しております教員の質、また授業力の向上ということを高めていくために、昨年度から組織力向上実践研究授業指定校、タテ持ち教科の研究のほうを進めております。

研究主題は、「基礎・基本を身につけ、生徒が意欲的に関わり合い、考える授業づくり」としております。生徒自身が授業で、もっと学びたい、もっと考えたい、深く学ぶことが楽しい、そういった授業づくりを目指して、授業研究を中心とした互いの授業を見合って学び合う研究ということを進めております。

研究内容の中で、学力向上の取組としましては 7 つの取組がございます。これらは、授業力向上の取組と、学力向上を支える取組の大きく 2 つに分けられます。このどれもが本

校の学力向上の成果につながるものとして、もう決して欠かせないものであると私たち教員は押さえています。ある意味、1つもし欠けたとしても、現在の天津中学校の学力の成果にはきつとつながらないのではないかと。一つ一つの取組を大切にしたい。そういうことを思って、日々研究をしています。

また、これも学校長によく言われることなんですが、目標を持って丁寧に取り組むこと。また、それを実際どうであったかという検証改善ということを大切にすること。そういった点は、全教員で場面場面、適切な検証場面の中で確認をしています。

また、上に示しております授業力向上の取組については、やはり学校文化の中で共に授業し合う仲間として、学び合うことのできる仕掛けを研究推進委員会を中心に取組を進めました。

授業の質を高める授業研究の充実としましては、4つのことに重点を置いて取り組んでいます。やはり、教科の壁ということが中学校では特に言われている中、私たちはいつか子どもたちを社会に送り出していく使命を担っていますので、この教科の目標の達成だけではなく、社会に出たときに子どもたちが、その社会の中で生き抜くことのできる力を、キャリア教育の力、4つの視点に基づいて授業を構成していく。そのことが、教科の壁を払って、お互いの授業を見合って高めていくということを研究しています。それが1つ目に当たります。

また、それぞれ経験値が違う教員が校内にはおりますので、それがなかなかそろわないといったことになると研究が進みません。それで、5つのポイントという、授業を改善していく点を明確にした授業研究を進めてきました。目標を明確に持つこと。また、この授業の中で子どもたちが楽しい、学ぶことが楽しいと思えるような課題を設定すること。そういったことを含めた5つのポイントに基づいて、自分たちの授業が、どの部分ができなくて子どもたちのつまずきにつながっているのか、そういったことを確認して取り組んでまいりました。

その成果としましては、やはり教育委員会の支援ということもありますが、子どもたちが考えることに汗をかくような、そういった授業での課題設定を行えたり、また教師主導で話すのではなくて、子どもたちがたくさんの言葉を使って教科の目標を達成するために活動できる授業が少しずつ増えてきたように思います。

そして、昨年度から取組を進めています、タテ持ちの教科研究につきましても、ただ、タテ持ちの教科を実施するのではなくて、これをお互いの授業を磨く一つとして取り組んでいきたいということで、「効果的な教科部会の実施」というものができないかということを考えて、今スライドでお示ししています教科部会の運営を行いました。昨年度は国語・数学でタテ持ちの授業研究を行いました。実際にどのように取り組んでいったかということの説明させていただきますと、まずは課題改善を図るための授業改善プランを各教科が作成しています。それに基づいて、じゃあ具体的にどのような授業にしようかということを経験部会で練り上げました。その際にも、目標としてどのような力を身に付けるのか、

そしてアプローチとしてどのような指導方法を取るのかを主幹教諭を交え、たくさん話をして計画を作成いたしました。そして、実際に授業を実施ということになるわけですが、このときもただ、タテ持ちなので自分のクラスだけを一生懸命やるというわけではなくて、お互いに教科のこれは国語の様子を示していますが、国語の教員、去年 2 名でしたので、私であれば別の教員の授業を見に行き、実際に計画したことの中で子どもたちがどう学んでいるのかということを確認をし、それを自分の授業に改善していかすという方法を取りました。ただ、実際に 1 時間もなかなか授業を見られないという問題というのも当然あります。

その中で、最初の子どもたちが意欲的に取り掛かる導入の部分であるとか、最も子どもたちが目標達成のために山場として活動している場面であるとか、そして定着状況を図る振り返りの場面とか、意図的に 5 分でも 10 分でも目的を持って参観をし合うことを行いました。そして、そうすることで、やはり自分の授業の場面でも子どもたちのつまづきをイメージして授業ができるということで、少し細かな手だてということを行うことができるようになったと思います。

そして、実際に実施した授業がどうであったかという定着状況の確認という点についても、かなり教科部会で、ただ単に子どもたちがよく頑張ったねとかいうのではなくて、目標を事前に設定しておりますので、それに対してどうであったかということを検証することに留意しました。ちなみに、定期テストであれば平均点が気になるころですが、そこだけでは当然なくて、その中で 40 点未満の生徒の割合がどのぐらいいるのか、また、学校の中でも課題とされています、記述式正答率がどうか、解答率がどうかもきめ細かく見るようにしました。

そして、私たちがタテ持ちをする中で何より心配していた点が、学級ごとのばらつきが起こっているのではないかと、どうなのかということも、それぞれの子どもたちの達成状況から細かく分析を行いました。

そして、そのことに基づいて、実際にどのように改善していくのかということ、主幹教諭も交えて具体的な案を出し合いました。それが次の計画に向かって結構きめ細かく捉えていることで、次の改善点にもしっかりつながったように思います。

ただ、最初からこのような教科部会の運営ができていたわけではなくて、エキスパートの先生方が訪問して下さって、そこで私たちの様子を見ながらアドバイスをいくつかくれました。例えば、全てそろえてしまうと教員の個性は死んでしまうので、やっぱりそろえるべき点と、それぞれの教師の持ち味で授業を展開していく場面というのが必要なんじゃないかということ、とても私たちにとって励みになった言葉です。実際に PDCA のサイクルを回していく中で、そろえるべき点と、それぞれの教員が持っている持ち味の部分で勝負する場面ということが、きちっと整理をして効果的な教科部会ということが、子どもたちに力の付く授業につながっていったんじゃないかと捉えています。

昨年度、まだ 1 年間で、そして今年度も引き続き取組をしていますが、このタテ持ちの

教科研究につきましては、やはり計画的に実施することによって、本校でも学力向上を支える取組の一つであるということは、間違いないねということは、教科部会でもよく確認をしています。

昨年度、11月に実際に行いました国語科の教科部会のレジュメでございます。各教科、やはり教科主任のほうが部会を行う中では、本日何を話題にして話し合うのかっていうことをきちっと計画をして実施しています。そこでこのレジュメの中で見ていただきたいのが、先ほど申しました学級ごとのばらつきがあるかないかということを見ている資料の一つです。

2学期の中間テストまでに、各学級がどのような状況であったかということの基本にいたしました。そのことによって、やはりばらつきがある学年があったり、学年ごとの定着状況も見て取ることができます。そこから、目標値設定していたものが一体どう変わったのかということ。また、40%未満の生徒の割合ということに注目して、ここでやっぱり苦戦をしている子どもたちは、ゆくゆく県版調査であるとか、全国調査、また高校行ってからも苦戦することが予想されますので、このきめ細かく捉えた部分を実際の授業のほうを改善して、子どもたちの苦しんでいるところを支援していくことを考えて取り組んでいます。

このレジュメで見ると、実は1年生の2学期の中間の辺りでクラスによってばらつきがある。また、1年生については、40%未満の生徒の割合を、学校経営計画の中では15%未満に抑えるっていう目標を設定してはいたのですが、達成していないということが分かりました。もう少し詳しく分析していきますと、男女の差があることとか、また二極化が緩やかに起こっているということが分かりましたので、こういった総合分析のもと、授業を変える授業での手だてをもう少しスモールステップで打つ、補充学習である加力学習を行う、宿題の部分での定着をもう少し強める、というような手だてを打って、この教科部会での確認をそれぞれの授業にいかすようにしています。

そして、これは実は2学期の期末テストの前の教科部会の様子でありまして、次の期末テストのときには、先ほど言った部分の改善が図られているかということ、検証場面を逃さないように教科部会で確認をしているということも取り組んでいます。期末テストに出す問題の内容もそうですし、子どもたちの状況がどうであったかということを検証の場面でうまくいっていたらいいのですが、うまくいっていない場合はまた更なる手だてを打つことを考えて取り組みました。

そうしたことをきめ細かく捉えていくことで、全校体制の加力学習ことも工夫して取り組むことができるようになりました。今まででしたら、教科だけ、または学年だけがやっていた部分に納まっていたところが、学校全体でその課題に対応してどういうものを補充学習として仕組むかということができてきました。スライドに示していますように、学び合いながらグループで子どもたちが自分たちの学力の確認をしている場面もありますし、右上の部分では、テスト形式でペアになって、片方の子が採点をしています。こういったような学力、学習を大切にすることが学校全体として高まってきました。

ただ、教科部会だけを一生懸命やってもなかなか学校全体のものになりません。去年から取組を始めているのが、教科主任会の計画的な実施です。国語・数学でタテ持ちは行いましたが、それが国語・数学にとどまりがちところが中学校の学校文化としてございます。それを教科主任会を行うことで全体に広げていく。また、教科主任会の中で今必要なこと、検証のこと、定期テストのこと、加力学習、宿題のことを練り合わせることで、研究が部分ではなく、全体に向かって広がっていくということができてきたように感じます。それを研究推進委員会や各学年会、会のほうへもつなげ、そのことを基に教科部会を行っていくという。組織の中でも、研究が広がっていく、お互いの実践が学び合いの場になるというようなことを留意して取組を進めました。

そうしたことで、ここにお示ししていますのは、昨年度 1 月に実施されました高知県学力定着状況調査の学力結果でございます。見ていただきましたように、タテ持ちを行った国語・数学におきましては、県平均を上回る結果を得ることができました。また、課題とされています、子どもたちが思考・判断・表現したことを記述として示すという、記述式問題につきましても、県平均を大きく上回る成果を出すことができました。基礎・基本的な内容の定着だけではなくて、少し汗をかくような問題に対しても、子どもたちが意欲的に解答をし、無回答率が低かったということは、私たちの達成感にもつながりました。また、2 学期の中間が終わったぐらいに気になっていた学級ごとの学力差につきましても、県版調査のデータを見たところでは、余り大きく開きがなく緩やかな形になっていたということも捉えられ、自分たちの取組の成果を感じたところです。

お示ししていますのは、昨年度の国語・数学のタテ持ちをした教科会による意識調査の振り返りの様子です。見ていただきましたように、国語・数学とも 3 年間を見通した系統的な指導に当たれたということ。また、そこに留意することで、子どもたちにポイントをきちんと持って行うことができたという達成感が出ておりました。また、若手教員に多いのですが、「定着状況を意識して指導するようになりました」ということを自分自身の高まりとして伝えてくれたという場面がありました。こういった取組を進めていくことで、お互い教科の専門力も向上しますし、また、教員もやったことが返ってくるということについてはとても達成感が持てます。でも、何よりも子どもたちに力が付いたということが、私たちの達成感になり、また次の授業を考えるエネルギーになったと考えます。

昨年度、タテ持ちを行って、若手の先生方と話す場面がとても多かったことを振り返ります。その中で、やはり私たち、経験が段々重なってきた教員が、検証改善を大切にすることで授業がうまくいく、子どもたちに響く授業になるということを教えていかないと、なかなか忙しさの中で根付いていかないなということをととても強く感じたところです。

そして、そういった 1 年間の振り返りを基に、本年度につきましては「チーム学校」として更なる向上を目指しまして、教科タテ持ちの拡充を行っています。5 教科で、教科指導力の育成のために実施しているところです。また、教科主任会も計画的に実施しているところですが、やはりここで教科主任の教科運営力というもの、子どもたちに力を付けるた

めにはとても必要ですので、教科主任会の中で、若手の教科主任の先生方も話をしていきながら、大切なポイントも抑えながら、カリキュラムマネジメントをできる力をきちっと身に付けていけるように、校内の中で学び合っていきたいと考えています。

いろいろと説明もさせていただきましたが、他の学校でもきつと取組を行っていることで、本校に一つ違いがあるとしたら、取組の前に計画をきちっと立てて、その取組を丁寧に行うこと。また、それがどうであったかという検証改善はきっちり大切にしていこうということを校内で確認しています。そこは少し胸を張って、忙しい中でも大切にしているところですので、そういった私たちが頑張っている部分も続けていきながら、10年後、20年後、30年後の子どもたちが社会に出たときに、少しでも力を付けた形で生き抜いていけるように、今、目の前の授業づくりというのを進めていきたいと思っております。

以上で、大津中学校の研究の取組について説明を終わります。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

そうしましたら、ここで宮川校長、森田教諭へのご質問等がございましたら、お願いをしたいと思います。いかがでしょうか。

(八田委員)

大変うまく運営されているということで、ありがとうございました。

今、各学年3クラスになるのでしょうか。

(宮川校長)

2年生が3クラスで、1年と3年が2クラスです。あと、学年で二、三名増えると3クラスになります。

(八田委員)

そうすると、基本的に2クラスということは、今のところ2人で教科を持つということなるわけですか。分かりました。

あと、最後のほうで、かなり忙しい中でそういう時間を何とか確保することが非常に重要だとおっしゃっていたので、もっとそういう教科の中でちゃんと授業の検証をしたり、お互いが勉強をしたりという時間を作るためには、実際、先生が感じる現場としては、どの時間をもう少しこっちへ振り替えたいとか、そういうことありますか。

(宮川校長)

教科部会は週のコマの中に入れて1時間50分の教科部会を設定して、各教科がそれぞれ教科部会をしていますけれども、なかなか50分では終わらないときが多いと思います。そ



の終わらない部分は、その教科の先生方がどういうふうなところでやっているかという、放課後にやるわけですね。でも、片方が部活動をやって、片方が普段部活動がなくてというところでも、副担任の先生が部活動の終わる若い先生を待って、それからきちっとその日に課題であった積み残しの部分の教科部会を終わらせて、次の日の授業に向かうという、いろんな雰囲気タテ持ちを始めてから本校には生まれてきたようには思いますが、今年から働き方改善、業務改善のほうの指摘も受けまして、そこがなかなか校長として苦しいところです。どういうふうにも子どもに向き合う時間を作るかというところが今、教職員と考えているところです。

(八田委員)

ふだんの昼間の授業時間中にそういう時間をもう少し確保するというのは、今の科目の分担からすると難しいですか。

(宮川校長)

中学校の場合、なかなか持ち時間数がありまして、29 コマの中で先生方は大体 20 時間以上持っています。校務分掌を抱えている先生は 18 ぐらいにとどめるんですけども、その空き時間、1 日に 1 時間、2 時間の空き時間の中で何をするかというと、採点もありますし、子どもたちが日に毎日提出します宿題でありますとか、日記でありますとか、そういったことも毎日きちっと見て、きちっと返信を添削して返してやらないと、「いくら出しても何も見てもらえないんだ」という子どもたちが育ってしまうと、もうやってこなくなるんです。うちの学校の調査項目のテストの中で無回答率が非常に少なくなったというのは、チーム学校としての取組の一つでもある、教員補助員でありますとか先生方が、宿題とかそれから提出物なんかを白紙で出した場合には、必ず返して、必ず提出させるまできちっと後詰めをするということをここ数年間繰り返してきて、もう子どもたちは、何か書かないと返してもらえないということが定着してきたので、試験でも何も書かないで無回答で出すことが非常に少なくなってきたように、子どもたちの回答を見ていて思います。

(八田委員)

ありがとうございました。

(竹島委員)

お話の途中で、教員の持ち味や個性が無くなるみたいなことをおっしゃっていたんですけども、やっぱり先生方が同じ方向を向いてないといけないと思うんですね。でも、それで先生たちの意見の違いをまとめていく場合に、どんなご苦勞があったのでしょうか。

(森田教諭)

実は、4月にタテ持ちを去年最初に行った中で、板書も発問も何もかもそろえないといけない、しかも3学年分ということも最初はやってみようとしていたんです。ただ、先ほど学校長も申しましたように、とてもじゃないけど時間が、毎日の授業のことで追いつかなかったこともあり、また、そろえることで、経験値が違う若手の先生になると、なかなかきめ細かにできないということもありまして、やっぱり大きいところは当然そろえます。国語であったら言語活動で、リーフレットを作成するというところは当然そろえるのですが、その途中段階の持っていき方というところは、若手の先生だと子どもたちと近い目線で話ができるので、そういったところに任せながら、そのクラスの子どもたちの状況を捉えた板書も行いながら授業を進めていくことをしました。そこが私の言った持ち味ということで、大きいところはきちっとそろえて、ただ、流れの部分は少し、それぞれの教員の子どもとのやり取りとか、日頃のキャラクター性といったところで運営をしたというところですね。まとめるというところは、やっぱり子どもに力を付ける方法としてそれが効果的かどうかということで、はっきり切るときは切りました。やはり必要のないことというのは、授業時数も限られていますので、なかなかできませんので、これが子どもたちの中で必要となる部分であって力を付けるものであったら、2つの方法でやってみようかというようなところもとりました。

(竹島委員)

やっぱりこれから記述式ということをごく言われると思うんですけども、パーセンテージを見ても、伸びていると思っていいのでしょうか。

(森田教諭)

はい。

(竹島委員)

大津中学、1年でこの成績ですよ。大津中学校と似たような学校はまだないですか。大津中学校の取り組み方が良かったのか。何か比べるものがあるのかということをお聞きしたい。

(宮川校長)

いや、他校と余り比べるのは。高知市は20校ありまして、それを数字で出して比べることはできるんですけど。

(竹島委員)

従来の規模の学校でこういうことをやっているというところ。

(宮川校長)

なかなかそこはちょっと。どこの学校がどのぐらいの数字だというのは出してないので分からないですけど、一応、先生方に示すもの、それから高知市としてやっぱり目標とするものは全国平均を超えようというところと、うちは子どもたちと先生には全国平均よりはもう少し上を目指してやろうということで、子どもたちも教員も頑張っているところです。

(竹島委員)

目標の設定をある程度最初から高くしたみたいな感じですか。

(宮川校長)

最初から低い目標だったら、叶ってしまったら、「これでいいのか」と思ったらいけないので、大分高く設定したんですけど、達成してしまいました。だから、今年の高校 1 年生は駄目だったんですけど、今年 of 3 年生は入学してきたときに、本当に小学校から上がってくる子どもはそれぞれその年その年に特徴があって、学力にもすごく差があるんですけど、今年 of 3 年生はそんなに高くなかったんですが、調査が終わった後、自己採点したら、去年 of 3 年生と同じ点数ぐらいに来ていたんです。だから、その点数を見たうちの先生方が 2 年と少しやってきたことは間違いじゃなかったということで、先生方がやっぱりこのやり方でやっていこう、更なる課題を見つけてそれを克服していこうという。先生方 of 中間的な同じベクトルの方向が向いている部分については、これからも、私がいなくなってもそんなに変わるようなことではない研究が進められてきたかなと思っています。

(竹島委員)

やっぱり校長がおっしゃられたように、5 年後 10 年後の子どもたちのことを考えて頑張っていたきたいと思います。ありがとうございます。

(司会)

平田委員、お願いします。

(平田委員)

本当にチーム学校として学力向上に取り組んでいるということがよく分かりました。課題が見付かれれば、新たな施策に取り組んでいるということで。

私、1 つだけちょっと聞かせてください。5 ページの上のパワーポイントですけど、国語科教科部会 27 というところ、頑張っていますね。そこでちょっとご説明もありましたけど、ちょっと中身を教えていただきたい。いわゆるタテ持ちということですよ。そこでお話もございましたけど、1 年生 of 2 学期の中間がばらついたと。「教育は人なり」とか「教育

は指導者なり」とかよく言うわけです。私から見れば高い平均点を出したクラスの先生には指導力があると思いますね。そこでどんな会話が教科会ではなされたのか教えていただきたいと思います。

(森田教諭)

1年生は実は毎年私も感じていることなのですが、実は小学校である一定学級編成をしてきてくださるので、少し子どもたちの学力というか人間関係で構成をされているところがあります。それで、1年生の2学期の時点でいうと、割合、平均点の高かったクラスの子どもたちはとても真面目に授業での確認をしたり、家でも意欲的に学習する子どもたちが多く、それが夏休み明けに更に伸びた状況があったというところがあります。ただ、同じ1年生の集団ですので、その要素というのはほかのクラスも当然ありますので、その部分に対してやっぱりその持っている部分をどう引き出すかというようなことで、平均点の高かったクラスと同じことでは差は縮まりませんので、じゃあ何をやっていくかという授業での手だての部分であるとか、宿題も振り返りをさせるような宿題を出したり、また、加力部分でも少し小学校の部分も確認するような内容というもの出したというふうに、そういう教科部会を行いました。

(平田委員)

それともう1点ちょっとお聞きしたいんですけど、大津中学校というのは大津小学校、1小学校から1中学校へ全員上がってきていますよね。

(宮川校長)

8割です。

(平田委員)

8割ですか。

(宮川校長)

はい。

(平田委員)

その1年生の中でのクラス編成をしますときに、いわゆる小学校からのデータはなしに、何かバランス的な分け方というのは何かしてるんですか。

(宮川校長)

中学校は小学校から上がってくる生徒は、中学校の教員は分けられません。うちの場合

は1小ですので、小学校の先生が人間関係等で3クラスにしてください、2クラスにしてくださいというふうなお願いで分けてきてくれます。ですから、この1年生の2学期の点数のように、人間関係で、1小1中ですから、もう下手すると保育園からずっと中学校卒業するまで同じ人間関係で大津の場合は来るわけです。だから、その関係でこの子と一緒にしては駄目だなというようなクラス編成がなされてきますので、学力とかピアノであるとか運動能力はその次になるのではないかなと思っています。

(平田委員)

ありがとうございました。全体的に見まして、うまくクラス編成ができているなという感じももっています。ありがとうございました。

(田村教育長)

どうもありがとうございました。お話を聞くと、本当に県教委がタテ持ちの取組とか、いわゆる授業改善で、是非こういうふうに取り組んでもらいたいということを実践していただいている、本当に理想的な取組をやっていただけるように感じました。それで全国平均を大きく上回るような成果も出していただいているので、是非、他の学校も見本にしてもらいたいなと思いながら聞かせていただいたんですが、特に、さっきの話で出ましたけど、学力が向上した中でもいわゆるB問題的な記述式の問題とか思考力、こういったことの学力の伸びが顕著かなと見たんですけども、その伸ばすポイントを絞って言うと、どんなところだとお考えでしょうか。

(宮川校長)

ここも森田のほうも発言すると思いますが、授業の中でそれぞれ仕組んでいかななくてはいけないし、国語のほうでは本当に毎日のように言語活動が活発化するような、また、頭で考えて、友達の意見を自分が考えて、併せて自分の意見を述べるというような、そういう授業形態をとってきました。タテ持ちを受けたから去年今年で学力がすぐに上がったかという、そうでもないと思うんですけど、授業改善、私が赴任をして大津中学校7年目になるんですけど、4年間ずっと積み重ねてきても全然上がりませんでした。スーパーバイザーの先生やエキスパートの先生からの、子どもを見ていたら絶対上がりますよという言葉が、本当かなと思ったんですけど、子どもたちの学力が上がり始めると急激に上がってきて、それが先生方の自信になって、今までやってきたことが間違いではなかった。そして、授業で寝ている子どもが全然いなくなった。永野次長とか長岡課長が学校に、また委員会の方々が来ていただいたら、毎時間、毎回1時間は全校に授業参観してもらおうんですけども、自分が先に回って起こさないといけないという子どもが全然いないんですね。それから、もうここ最近では、朝の職朝で、県の教育委員会の方が来ますとか、どこの学校が視察に来ますとか言うと、子どもたちはもう待っていたかのようにその先生の授業でも

すばらしい授業をしなくてはいけないような活動をしてくれるような子どもたちになってきたというのは、本当に相乗効果といいますか。最初、大津で2年目に「高知県の中学校の学力って全国で何番目か知っていますか」という全校集会の話で、「真ん中ぐらいじゃないですか」という発言を子どもから受けて、「いや、下から2番目なんだよ」という話をし、それで高校、大学と行ったらどんなつらいことがあるか。もっと頑張らないといけないし、やっぱり学力に付け過ぎはないし、勉強し過ぎて頭が重たくなって起き上がれなくなった子どもはいないから、頑張って勉強しようということで、子どもたちは本当に、今年の3年生は去年の成績を知ってますから、僕は私は32問中何問正解していましたかとか、今年の3年生はどのぐらいいってましたかというふうな、子どもたちがそういう意識になってきているというのは、先生方と子どもたちが一体になって、学校は学力向上に向かって、基礎学力の定着に向かって、毎日進んでいるから、だから、学校行事にしましてもいろんな部分で保護者の方や地域の方々にもいろいろとお褒めの言葉を頂いて、子どもたちも本当に誇れるような鼻が高いような感じをしています。やっぱり言語活動も説明文なんかを書かすことは、意図的に国語の先生や各教科の先生が。主要教科だけがタテ持ちで学力向上に関わっているということではなくて、9教科全部が関わることによって、学校全体が教員の意識がチーム学校としてあり得るんじゃないかなと思っています。

(田村教育長)

ありがとうございました。やっぱり今のお話聞くと、子どもたち、いわゆる主体的に学ぶ意欲をいかに高めていくかというところが、結果、何か効果が上げられているのかなということを感じさせてくれました。ありがとうございました。

(尾崎知事)

どうもありがとうございました。大変ためになるお話伺って、本当に心強い限りだなと思いました。今、校長先生が言われたとおりだと思うんですね。本当に昔、高知の中学校の学力というのはどういう状況だったのかという中で、おっしゃるとおり、本当にそのまま子どもたちを卒業させてしまったときに、高校行ってどれだけ苦勞するか、社会に出てどれだけ苦勞するか、そういうことを考えたら、そもそも基礎学力をしっかり定着させて卒業させてあげるといことは大人としての責務だろうと、本当に思います。そういう中で本当に試行錯誤してきて、多くの先生方の努力があって、まだ46番、45番かもしれませんが、昔のように凶抜けて低い46番じゃなくなってきて、ほとんどもう遜色ない平均値レベルに近い形での46番、45番ぐらいに改善してきました。本当に一つ見えてきているのかなと思いますね。是非、大津中学校の皆さんのような取組を全県下にもっともっと広げていくことができればなと思います。本当にすばらしいなと思ったのは、もともと学級ごとの学力差というのが、入学した段階では、さっき言われたような事情によって高い可能性がある中において、結果として、この学力定着状況調査結果からいけば、学級ごとの学

力差が少ないところまで持ってこられたということは、結局、恐らくは先生方に対する指導、お互い助け合ってやっていかれて、全ての先生が一定以上の指導力を持っておられる結果ということにつながってきたということなんだろうと思いますね。タテ持ちも含め、様々な取組の効果が非常に大きかったのだらうと思います。また、これ、ある意味、当たり前のことではあるのかもしれませんが、是非、教育現場で今後も徹底していかなければならないことだらうと思うんですけど、結果を今まで以上に意識して指導されるようになった、これが大きいと思います。私たちだって、例えば産業振興の取組をする、移住促進の取組をすると、必ず結果というのが出てくる。結果を世の中にいい場合だって悪い場合だって明らかにして、悪ければ怒られる。良ければ褒めていただくこともささやかにあるでしょうけど、悪ければ怒られることがたくさんあるわけで。そういう形で、やはり結果を意識して、結果ということをしっかり尊重して対応していくということが非常に大事なことだらうと思います。心から本当にすばらしい取組に大変感銘を受けたところであります。

2点、今後、タテ持ちの運用に当たって教えていただきたいと思います。1点目は、ここ「3年間を見通した指導に当たることができた」と書かれています。タテ持ちと言いますが、縦として持った結果として同一学年で横で助け合うことになるというところに意義があるということなんだろうと思うんです。これはやっぱりタテ持ちにして、1年生、2年生、3年生を同時に教えるということは、ある意味、教科の教え方の体系として非常に有意義ということなんじゃないでしょうか。それが1点目。

2点目ですけど、タテ持ちそのものを採用してなくても、ここの教科主任会で「実践の共有・研究推進」をされていると伺いましたが、これは、タテ持ち的に同一教科についてクラスごとの先生方同士が、例えば先輩後輩が教え合うというOJTを普及させるという取組について、タテ持ちをやってない教科にも何らかの形で実践を及ぼしていかれたということなんだろうと思うんですが、この教科主任会を通じて、どういう形でその取組を共有していくことをされたのか。いわば、3教科、5教科というのをどういう形で9教科にされていかれたのか。今後、タテ持ちの取組を充実させる意味において、この2点、ちょっと重要なかなと思ったものですから、教えていただければと思います。

(森田教諭)

ありがとうございます。

3年間の見通しにつきましては、例えば国語の書く指導、書くということの能力を高めるための指導につきましても、今ちょうど感動する作文を書こうというような会議をやっているんですが、その中で、1年生であれば、自分の理由を丁寧に詳しく書くというような指導をします。2年生だったら、それが知識や体験と関連付けて自分の考えを書く。3年生になると、客観的な数値や説得力を持って書くという。それが本当だったら横並びになったときには、その学年単体だけの指導もですが、縦に持つことで、やっぱりそれぞれの系統、段階というのがあって、求めていくレベルを急に作文コンクールで優勝するようなそうい

うものを目指すのではなくて、全員の子どもたちに段階的な力を身に付けるということ踏まえた授業での指導を行っていくという面では、具体的にそういったことが確認できる中で、思わず若手の先生たちが上手に書かすことだけを思ってしまうんですが、そこではなくて、やっぱりきちっとその学年の発達段階に応じた指導を行っていくという意味で、これは国語、数学とも、つながりの部分も併せて、どこでのつまずきが3年生で大きくなるのかということと話ができたことが有意義であったと思っております。

また、教科主任会のほうですが、実は5教科で行うことが結構多くて、それ以外の9教科で行うときもあるんですが、基本的に9教科になったときに技能教科は本校では全員タテ持ちなんですよね。だから、5教科の部分に9教科が入ったことで、国数は昨年度タテ持ちをしたんですが、去年の段階でいうと、技能教科はもちろんタテ持ちで、自分たちが実践を伝えることで、やっぱり全部見ることのほうが子どもの状況が丁寧に捉えられるよねというような意見交換の部分ですごく活発になったということをおもいます。本年度は実はまだ数回ぐらしか教科主任会が行えていなくて、先ほどお示しした中での実践の部分で、検証をどう捉えて改善していくかということをもっと具体的な単元の中での状況を意見交換して、それが教科が違っていてもいかにされるような形でということをおもいます。主幹教諭が工夫をして、文字化して分かるようにするかということをおもっています。

(尾崎知事)

今年になって、教科会やタテ持ちをやっていなかった学校から新しい先生方が来られましたでしょう。その先生方は、教科会の取組、タテ持ちの取組になじまっていますか。

(宮川校長)

最初は戸惑ったとは思いますが、やっぱり本校の研究の方向性にすぐになじんでもらわなくてはいけません。そうすると、レベルを積んでもらわないといけませんので、4月の半ばに模範の授業を見せます。初任者ももちろんいますので。それから教科部会や学年会、研究推進委員会から下りたことで、だんだんうちの授業のやり方、考え方についてきてもらう。だから、毎年の課題は、何人か学校の先生、4分の1ぐらいの職員が替わるため、できて当たり前という先生は余りいないので、初任者の先生や市外やいろんな先生方をまた今年、年度で仕上げていくような研究推進。学年授業研でありますとか全校研でありますとか、いろんな研究会を通じて、また教科部会や教科主任会、研究推進委員会で下りてきたこと。変な授業をしてしまうと、子どもに駄目出しをもらってしまうような子どもが成長してきていますので、だから先生方も必死にならないといけません。それをタテ持ちでやることによって、学年を2人の先生が持っていますから、片一方のベテランの先生や今までいた先生がこうでこういうふうにというような話が、休み時間や昼休みにできるので、学校の休み時間や昼休みの時間帯に子どもの悪口を言う先生がいなくなって、授業の話は初任者の先生に、「ここが大事やからここを忘れたらいかん」とかいう、そういう



話し合いがなされて、「何組が頑張っちゃったね」とかいう話が職員室の中に聞こえるようになったというのは、非常に学校自体が変わってきたなと感じています。私が赴任した当時は、「私が英語を3年間教えてもアルファベットも書けない生徒なんですよ」と僕に言われた英語の先生がいましたけど、それは先生の教え方が悪いんじゃないかという話をした。子どものいいところをどんどん話をして、授業の大事なことが会話で生まれてくるような。そして、やっぱり学校も数字で結果を出していかないと、先生方は必死にならないのかなというところも一つは改革の方法としてありました。

(尾崎知事)

ありがとうございました。本当に素晴らしいマネジメントですよ。本当に勉強になりました。ありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いします。

(司会)

八田委員、お願いします。

(八田委員)

教科部会を週に1コマ分されるんですけど、もう少し具体的に、例えば毎週の教科部会では、どの科目でもいいんですが、大体どんなふうになんか議論されているのかということをお聞かせいただけますか。一例で結構です。

(森田教諭)

ありがとうございます。実は今日も3時間目に国語の教科部会があったんですが、8割方授業の話です。今後、来週ぐらいに入っていく単元について、どのような力を付けさせるのか、どの言語活動を通すのかという、本当に具体的に、子どもたちのつまづきは多分ここにあると思うので、こういったことを考えていこうということを、一つ、2年生を入口に始まったら、先ほどの話のように系統の指導なので、じゃあ3年生では1年生ではという授業の話を中心として、あとは夏休みの宿題のことをちらっと確認して今日は終わりました。そういったことが、どの教科でも授業の話を中心に行われています。

(八田委員)

基本的には、まず、次の授業のための授業案をみんなで相談しましょうみたいなことが主なことなんですか。

(森田教諭)

はい、そうなります。

(八田委員)

あともう一つ。7つの取組というのが最初にあったんですけども、その中で学習状況調査とか学力調査を効果的に活用と言われていましたが、具体的な活用方法を教えていただけますか。

(森田教諭)

先ほど、授業を作るときにヒントにしているのが全国調査の問題の中身です。学力調査の問題、県版調査もそうですが、本当に子どもたちの今育てるべき思考力、判断力、表現力を具現化したものだと思っていますので、それを授業の単元の中に組み込んで授業をしたり、また、検証として評価問題として確認問題として使ったりということをしています。あとは定着状況を捉える数値として取り扱って、じゃあ実際にどうするかというふうに使っています。

(八田委員)

それで、具体的にこのときの問題を教材とかにされているかということ。

(森田教諭)

はい。

(八田委員)

ありがとうございます。

(尾崎知事)

この放課後の学習ですね。放課後の学習。これ、多分、今後いろんな学校で課題になっていくだろうなと思っているんですけど、ものすごくいろいろ学力差がある中で、放課後の学習ってなかなか大変ではないかなと。特に非常に学力に課題があるお子さんがいらっしゃって、それが例えば中学3年生ぐらいになってくると、その課題が非常に累積していたりしていて、そういう中において、どうやってこの放課後の学習内容そのものを充実させていくかというのは非常に大きな課題だと思うんですが、大津中学校さんでいろいろ工夫されている点で、もしアドバイスとかあったら教えていただければ有り難いです。

(森田教諭)

ありがとうございます。放課後学習は加力学習として昨年度も研修でかなりもんで考えたところですが、実際に終わりの会という、6時間目が終わった後に学級で振り返りをする時間に、全校で取り組む10分での補充学習というのがあります。その後、下校になってから、週に3日、補充学習ということで放課後学習を実施しています。そのときの基準についても教科部会で検討し、研究推進委員会でも練り上げて、中身としては、定着状況

を測るテストを実施して、その基準を超えなかった生徒は全員残す。そして、次のテストのときに合格できるように、つまづいているところをワークシートなり個別の支援なりをして高めていくというパターンのもと、先ほど言われました、物すごく学力差がある子どもたちについては別のちょっと教室に移って、本当に一对一の対応をしています。そちらのほうがやっぱりそういう子どもたち安心しますので、だから、放課後学習につきましても3つぐらいコースがありまして、それで適切に子どもたちが必要なところへ行って学習を受けるといように工夫しています。

(尾崎知事)

先生方が全部関わっておられますか。

(森田教諭)

そうですね。担任、副担任はもちろんですが、あと放課後学習支援員さんが一緒に関わってくれています。

(尾崎知事)

一对一とかの場合はどちらかというと先生のウエイトが高くて、多数のほうは支援員さんが。

(森田教諭)

そうですね。一对一は学級担任が多いですね。

(尾崎知事)

なるほど。どうもありがとうございます。

(森田教諭)

ありがとうございました。

(司会)

それでは、宮川校長、森田教諭、ありがとうございました。

続きまして、越知町教育委員会・山中教育長、中学校・吉岡教頭をお願いをいたしたいと思えます。

(尾崎知事)

よろしく申し上げます。

(山中教育長)

越知町教育長の山中弘孝と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今日は本来でしたら越知中学校の校長、渡部校長が出席してご説明をするところでしたが、出席できなくなりましたので、代わりまして発表させていただきます。

それでは、まず、越知町の資料、ごらんになっていただきたいと思いますが、まず、町の状況でございます。幼稚園が1園、それから保育園が1園、そして小学校、中学校もそれぞれ1校ずつでございます。保幼小中、それぞれゼロ歳から15歳を見通した教育に取り組んでいるところでございます。

下段のほうでございますが、越知町の学力向上の理念といたしまして4点を挙げております。一つには、「個人の能力によって、学力差を生まない」。2つ目は、「学年集団の特性によって、学力差を生まない」。それから3つ目が、「家庭・地域の教育力の差で、学力差を生まない」。そして4つ目が、「教員の経験や力量の差で、学力差を生まない」。このことに越知町教育委員会と各学校が組織的に取り組み、学力向上に取り組んでいるところでございます。

次のページでございますが、本町の学校改革は平成25年度からでございます。教師が学び教師が育つ学校づくり事業の県の指定を受けまして、西留安雄先生を招聘して、校務改革、そして授業改革に取り組んできたところでございまして、これが学力の向上につながったものと考えておるところでございます。現在、西留安雄先生には越知町の学力向上スーパーバイザーをお願いしておりまして、現在もご指導いただいているところでございます。また、高知県教育版アクションプラン、それから、そのほか、放課後学習支援事業等の補助金を得まして、越知町の学力、それから豊かな人間性の育成に大変大きく、それによりまして進展をいたしました。この場をお借りいたしまして感謝を申し上げたいと思います。

それから、2ページの下段でございますが、全国学力・学習調査の結果でございます。この3年間、小・中学校とも高い水準を維持することができております。特に中学校において、国語A・B、数学Aにつきましては、正答率が順調に伸びてきております。

それから、3ページでございますが、これからは「教科の枠を超えて教員の授業力を磨き合う取組」ということでございますが、まず最初に、下段にありますように、平成19年度からの全国学力・学習調査の越知中学校の平均正答率、全国比を載せております。平成25年度から全国平均を超えるようになりました。

4ページをお願いします。平成24年度からの取組を載せております。3つの取組とプラスワンでございますが、一つは、成果を生む組織、チーム学校。2つ目は、効果的な方法を創り行う分析と評価。3つ目は、多様な生徒を育てる実践、必要な教育でございます。プラスワンは、生徒が主体的に取り組む、学ぶ集団づくりの取組でございます。

4ページの下段でございますが、3つの取組の①について説明をいたします。全員で成果を作るチーム学校に取り組んでおります。一つは教科のタテ持ちでございます。それから、

学年団組織の廃止を行いました。これは全員が担任という思いで当たるというものでございます。それから、評価活動の協働でございますが、成績会議を行い、評価基準、物差しでございますが、それを共有するものでございます。それから、若年教員の育成。ベテランの授業を見させる。そして、教科横断的な取組としまして、言語活動、探究的な授業づくり、定期テストの配分、パフォーマンステストなど、若年教員の育成に努めているところでございます。

5 ページにつきましては飛ばさせていただきたいと思っております。

6 ページの上段でございますが、効果的な方法を創り出すための分析でございます。

次に、下段のほうでございますが、改善のポイントでございます。平成 24 年度は 3 分の 1 しか全国平均を超えることができませんでした。注目の 1 でございますが、もう少し全国平均を超える生徒が、実際あと 4 問正解すれば全国平均を超える状況でございました。また、全国の正答率が 70%を超える、比較的簡単な問題の誤答が多く、これを改善することだと考えておりました。いわゆる簡単な問題を潰していくということと、指導の抜かりを潰していくというところでございます。2 つ目の注目は、ほとんど解けない生徒は全国平均の正答率の 50%以上に上げるということでございます。ほとんど解けない生徒を 50%以上に上げるというところでございます。全国の正答率が 70%以上のしよい問題は、確実に解けるまで指導する。ここに鍵があると渡部校長は申しておりました。

次の 7 ページ上段でございますが、3 つの取組の③は、学校と地域・外部人材がコラボし教育力を高めるチーム学校システムでございます。一つは、概念と資質・能力が育つ「授業システム」。2 つ目は、家庭学習で学力が育つ「宿題システム」。3 つ目は、社会性や人間性が育つ「体験・部活動システム」でございます。

7 ページの下段でございますが、「越知チームシステム」の説明をしますと、授業システムのほうは、他教科教員と学習支援員、学力サポーター、学力向上サポーターでございます。それに地域人材、教育委員会が支援をする体制でございます。

他教科教員につきましては、協働授業システム。関連内容で参加をするもので、英語を利用した教科授業等でございます。それから 2 つ目が、授業研究で協働研究をする。3 つ目が、補習システム。4 つ目は、校内漢字・英語テストの実施システムでございます。採点につきましては、教科を超えて全ての先生が参加ということでございます。5 つ目は、学力状況・成績評価を協働で行っております。

学習支援員は、常時の授業の支援。それから宿題システムとしまして、採点・直しの指導。それから補習・個別支援システムということで、対応をいたしております。それから越知塾の運営に従事をしているものでございます。

地域人材でございますが、地域人材の活用は、総合的な学習の時間講師とか、体験活動の指導支援を行っていただいております。

教育委員会のほうでは、総合的な学習の時間の支援を行っております。養護教諭、それから事務職、教諭と区別なく生徒と関わり、評価分析にも参加をいたしております。

宿題システムは、他教科教諭と学力向上サポーターが支援をします。他教科教諭は宿題システム。これは学級担任も教科担任も全て超えて未提出の者への指導。それから間違い直しの指導に当たっております。学力向上サポーターは、宿題システムの採点、それから状況の記録、それから状況の報告、宿題の形式や内容改善の助言を行っております。

体験・部活動システムは、教育委員会と地域支援コーディネーター、外部コーチ、部活動の外部コーチでございます。それから地域人材の方で支援を頂いているものでございます。教育委員会は、総合学習の時間の企業との連携・体験活動等の支援。それから、地域行事との連携を支援いたしております。地域支援コーディネーターは、総合的な学習の時間、外部人材との調整を行っております。外部コーチは、部活動の運営の補助を行っております、5つの部活動が利用しております。地域人材でございますが、地域ボランティア活動の援助。防災学習。それから命の学習、健康教育を支援しております。

8ページの上段でございますが、基礎学力の向上の取組についてご説明申し上げます。授業では、基礎的内容の理解や演習に今までより時間を使うこと。単元計画の作成・修正は教科担任が協力し合う。宿題は、基礎的問題を定期的に年間を通して出題し、やり直し指導をする。採点の分担を全員で行い、それから全員で補習。定期的に宿題の状況を分析し合うものでございます。定期考査でございますが、定期考査は単なる評価テスト、それから成績表作成テストから、学力定着のためのテストに変えるということでございます。考査前指導と各教科共通の問題構成で他教科と比較を可能にしております。評価・修正は定期考査の結果分析を丁寧に行い、改善と指導を確実に行っております。成績会議を実施し、全員で学力を評価しております。これは全ての教科を超えた形で行っております。未到達内容の再指導や補習の計画を共有しております。それから指導改善につなげているということでございます。それから個人指導は、宿題の内容の改善や間違い指導を充実する。できるまで指導する。時間を空けて再指導する。放課後や長期休業に個別支援を全職員で行うというものでございます。

これ以降の資料につきましては、越知中学校で教職員に理解をしてもらうために配付している資料でございますので、説明は省かせていただきたいと思います。

なお、私に発表のテーマとして与えられたものに、教員同士の学び合いということがございましたので、今日、新たに追加資料としまして、教師同士の学び合いということで、一つは越知小学校の例。それから、越知中学校の数学のタテ持ち。それから越知中学校の教科を超えての学び合い。それから学年を超えての学び合い。教科内の学び合いというのを作らせていただきましたので、本日提出させていただきました。

それからもう一つ、この前の中間テストのいわゆる数学の課題の状況。問題の配分の仕方ですね。1、2年の3年生の中間テストですけれども、1、2年の復習。それから技能と活用をその中へ配分しているという状況でございます。その裏でございますが、3年2組ですけれども、50%以下の分については50%以上に上げていくというところでございます。一応、3年生の目標としましては85%を目標にしているということでございます。

私の説明は以上でございますが、細かいところにつきましてはまた教頭先生のほうから答えさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(司会)

ありがとうございました。

では、山中教育長、吉岡教頭への質問がございましたらお願いします。

(八田委員)

大変すばらしい取組で、大変感動して伺いました。まず一点は、非常にうまくいろんなシステムが動いていて、特にチーム学校の本当に理想的な形が再現されていると感じたんですけれども、そのときに学校の規模というのは結構鍵になるのかなという気がして、今の越知中学校のこの規模というのは非常に全員で全員を見るというのにやりやすい、それほど小さくもなく、大き過ぎもないということを感じましたので、その学校規模の、一般の中学校と比較した場合の特質のことと、それから、それに伴って教職員数が変わってきますけれども、今の教職員の中のベテランと若手のバランスの問題で、例えばこんなふうにならば本当に指導していただけるんだったら、県からもっとたくさん若手をここに送って、指導してもらいたいけど、そういうわけには多分いかないと思うので、その辺の最適値というのか、どういうバランスがいいのかというようなところがあればお願いします。

(山中教育長)

本当にうちの場合は、小規模の自治体でございますが、保幼小中、それぞれ1校1園ずつでございますので、校長、園長会も一緒にやっておりますし、いろんな方向、方針を出してもずっと連携し合える体制ですので、中学校が2校、それから小学校が2校となると、なかなか調整が難しいところですが、うちの場合は小学校、中学校が隣接しておりますし、それに渡り廊下を付けましたので、本当に一貫校のような状況になっておりますので、すぐ校内研究を合同でやっているんですけれども、小学校へ行ったり、中学校へ行ったりすることが容易にできるようになっておりまして、学力向上や連携した教育については非常にいい体制ではないかなと思っております。他町村のように、はや佐川町のようになると、中学校も複数ありますし、小学校もありますので、なかなかうちのようにならば統一した取組というのが難しくなるのではないかなと思っております。

それから、教職員のバランスについては吉岡教頭から説明します。

(吉岡教頭)

今年度は40代以上の教諭、ベテラン勢が4名、若手が6名になっております。最近では半分以上が30代以下の若手の先生方が増えてきておりますが、いい感じにちょうど半々ぐらいのバランスで推移をしております。若手の先生方がどんどん増えてくるこれから先の現

状を考えますと、やっぱりちょっと不安はあります。

(八田委員)

半分ずつ。

(吉岡教頭)

ベテランもいて、若手もいてという、いいバランスで今は来ております。

(八田委員)

先生のご経験からすると、もう少し大規模校とかで同じような取組をしようとする、何か難しさとか考えられることはありますか。例えば、先ほど大津ではまだ3クラスぐらいですけど、もっと大きくて5クラス、6クラスとなったときに、同じような取組は多分できないのかなという部分もあるような気がするんですけども。

(吉岡教頭)

そうですね。私、前任校がちょうど3クラス・3クラス・3クラス、その前の学校は6クラス・6クラス・6クラス規模の学校でした。かえって大規模校のほうが、学年団が大体10人ぐらいの規模で、学年で動くことが多いと思います。高知市内は特に、10人ぐらいの規模の学年団であれば、その中での協働が可能ではないかと思います。中規模校が、全員で共通理解をして一緒に進んでいくというのは一番難しいかもしれないと思うんですが。ただ、越知中学校でも、越知町自体そうだったんですが、先ほど大津中学校さんもおっしゃっていましたが、やっぱり最初から全員が足並みをそろえて、「さあ、やりましょう」と、なかなか全員がそろって始められるという状況は、どこの学校でも、どんなに小規模でも、大きいところでも難しいかと思います。やっぱりやってみようと思う方が1人、2人と増え、それで成果が出ていけば周りを巻き込んでいって、だんだん学校全体へと広がっていく取組になると思います。

(八田委員)

あともう一点だけ。最初のページの「おち家の学力向上の理念」というところで、確かな学力と教育の質の保障の第1番だけびんと来なかったんですけども、「個人の能力によって、学力差を生まない」というのが少しよく分からなかった。この学年集団の特性とか、そういうのは分かるんですけど、個人の能力というのによって学力差を生まないというのは、みんなが同じようにできるレベルにそろえようというふうにも聞こえるんですけど。個人個人が持っている能力をそれぞれに伸ばしてあげるといったらちょっと逆なのかなという気がしたんで、何か思いがあればちょっと教えていただきたい。



(吉岡教頭)

この個人の能力というのが、越知町の最初のスタートがそうだったんですが、やっぱり中学校に、小中連携の中で、やっぱり中学校に入ってきて本当に分数、小数から分かっていない、できないようなお子さんが、生徒さんがやっぱり入学をしてくる中で、小中連携をどう進めていこうかというところでこの視点が出ました。それは何回教えても、ずっと指導してきても、この子はやっぱり勉強がしんどいんですよというのを先生が言い訳にしてもいいのだろうかという意味の、しんどいお子さんだったら人の何倍も、他の子の何倍も手を足してあげて、やっぱり力を付けて自信を持って学校へ来れる、そういう状況にしてあげるのが教師の使命ではないかというところで。

(八田委員)

個人の能力に応じてちゃんとしましょうということですか。

(吉岡教頭)

はい。そうです。

(八田委員)

分かりました。ありがとうございます。

(司会)

では、竹島委員、お願いします。

(竹島委員)

長年の保幼小中連携の賜物だと本当に思うんですけども、やっぱり高知県の郡部の学校はこういった規模の学校が多いと思うので、このおち方式を広めていってもらいたいと思う。

あと、今、教頭先生がおっしゃったように、若手が多いというのがちょっと先生の割合で意外だった。いい先生は置いといてくれみたいなことでうんとベテランの方が長年やってらっしゃるかなと思ったんですけども、普通に異動はあるんですよね。

(山中教育長)

はい、お答えいたします。それほどこの教育委員会でもそうだと思うんですが、やはり最近は大量退職、大量採用という時期に来ていますので、やはり新採さんを小中とも頂いておりますので、そういった意味で全体的な若返りが図られているところでございます。やはりそこがベテランと若い先生とうまく、同じ学年でA組・B組とか、1組・2組に分かれたときに、片方にベテランを付けて、それからもう1つのクラスは若い先生を付けて、

ベテランの先生が若い先生に教えていくという形で育成が図られておりますので、その若い先生がどんどん入ってくるということは、うちにとってはうれしいことだと思っております。

(竹島委員)

うちで育て、ちょっと大規模校へ行けばいいみたいな感じ。

(山中教育長)

はい。特に若手の教員も育成をしてもらっておりますので、やはり研究授業の後にまた若手だけが集まっただけの指導もあつたりとか、そういう機会にも恵まれておりますし、今の探究型の授業も進めていく中で、やっぱり授業の流れをきちっと初年度から覚えていきますし、もう2年ぐらいたつたら本当にすばらしい授業ができる先生にもなっていっていますので、本当にいい状況で先生が育っていると思います。

(竹島委員)

あと、7ページの養護教諭や事務職も教諭と区別なく生徒に関わり、評価分析にも参加しているというんですが、これはちょっと特別なことですよ。

(吉岡教頭)

職員会等もできるだけ参加していただいておりますし、成績会議と支援会、校内支援会はもとより、成績の会のほうにも機会があれば、都合が合えば参加をしていただいております。教科部会とか成績の会の中でやっぱり出てくるのが、50点以下のしんどいお子さんをどう手だてをしていくかというような話合いになってまいります。やっぱり養護教諭の先生も知っておいていただきたいですし、事務の方も事務の立場でどういった支援ができるのかと。例えば、ちょっと教材足りていますかとかいうような、こういう資料がこの子のためにちょっと欲しいんですけどというようなところで相談したときに、「ああ、あの子ね」ってというような理解をしていただくためにも、「チームおち」ということで。

(竹島委員)

そうですね。やっぱりここはみんなでチーム学校という形で携わっているということ。

あともう一点、8ページの個別指導のところなんですけれども、宿題の内容や改善というところなんですけれども、大変な子どもさんとかいろいろ個別指導とかもやっていて、卒業までには平均まで持っていけているのでしょうか。

(吉岡教頭)

それぞれ、昨年度で言えば、進路については本人がこの学校へ行きたいと、第一希望の

学校に全員が合格をしております。やっぱりこの学校へ行きたいと言ったときに、その夢が叶うぐらいの力は付けておいてあげたいということで、それぞれ無理に詰め込んでいるわけではないんですが、その子が夢を持ったときに、希望を持ったときに、そこがかなうための指導を個別にしております。宿題についても、一斉に全体で出す宿題もあるんですが、その子のためだけに出す宿題もいろいろして、対応をしております。

(竹島委員)

ありがとうございました。

(平田委員)

越知小学校・中学校の学力向上対策の取組見ながら、大変すごいということは耳にしておりまして、今日改めて教育長のほうからお話を聞きまして、さすがだなと思いました。データの、学力・学習状況調査で、平成 25 年度から 28 年度にかけて大変全国平均を上回って伸びていますよね。大変きめ細かな、先生たちが組織として一斉に取り組むためには活字で課題、取組を表現しているなという感じを受けました。私、どちらかというたらアナログ的な発想しか持っていませんので、こういうふういきめ細かく一人ひとりの教員が取り組むためにはこういうことを文章化するというのは大変大事なことだなとつくづく考えさせまして、本当にありがとうございました。

今日のお話とはちょっと違いますけど、私、昨年度、この総合会議で越知の教育委員会の教育長さんを初め、先進校へ訪問して、「どんな取組をしていますか」ということ聞いたら、「当たり前のことしかしてませんよ」という返事だった。ある教育雑誌に教育長さんが、どうも当たり前の水準が越知町は違うという表現で書いておりました。そのこの当たり前の水準を強く感じたのは、どこでそれをどう考えたのかということですね。

それと、越知町といえども大変広いと思いますけど、よく越知町は教育の町であると、目標を掲げているということをお聞きですけど、それは市民も巻き込んでの話だと思いますけど、そこで教育長さん、最もご苦労されたことはどんなことかというようなことの点、2点、ちょっとお聞きしたいなと思っております。

(山中教育長)

そうですね。当たり前の教育というか。それにつきましては、やはり福井県とか秋田県に行ったときに、その取組を見まして、やはり丁寧な指導とか、それからやっぱり宿題をきちっとやるとか、そうしたことがきちっとできている状況を見たときに、そこをうちなんかもちきちっとやれるような家庭であつたり学校にしなくてはいけないと思いました。やはり学力を中心に考えていくのに起こりますのは、越知町のように経済的な部分が弱い町は、教育で子どもを伸ばし、負の連鎖を断ち切りたい、それからまた育った子どもたちがちゃんと税金の払えるような立派な社会人になってほしいという、私自身が余り恵まれな

い家庭に育っておりますので、やはりそういった思いもあります。

それから、教育の町でございますが、やはり最初の頃は教育長が学校へ行くといったときに、事前に連絡がないと困るみたいな学校の状況でございました。今は全然、今行って授業を見せてもらったりすることも問題のないところで、それから保護者が行っても、それから外部からの人が行ってもすぐ案内できますが、平成 25 年の市町村教育会議のときも僕は発表させていただいたんですけども、そのときの段階ではなかなか学校というのは敷居が高かった、学校はなかなか開かれてなかったということもありました。それが徐々に開けてきて、それから学力が高くなることによって、地域の人たちの協力も、学校に対する思いも強くなって、協力者が広がってき、学校を中心としたそういったコミュニティ的なものも育ってきたというところでございます。

(田村教育長)

どうもありがとうございます。正に、チーム学校の取組、非常に緻密に考えられていて、システムというような表現をされておりますけども、仕組みとして作られているなどというところを非常に感じました。

そういうことで非常に成果も上げられているということですが、一つだけ。余りにも緻密にできているので、これをしっかり運営していくというのは相当なリーダーシップがないと、うまく機能しないんじゃないかなという心配が一方であるんですけども、その辺りをどのように考えられておられるのか。要は、今、非常にすぐれた校長さんがリーダーシップを発揮され、また教育長さんと本当に一緒になって連携して、うまいリーダーシップがとれているということじゃないかなと思うんですけども。それとこのシステムがうまく組み合わさって非常にうまく機能していると思っているんですけども、そのリーダーシップの部分が次の人に代わったときに十分機能していくんだらうかというのが若干心配になりまして、そのことをちょっとお聞かせいただきたいというのが一つ。

もう一つ。基礎学力をしっかり伸ばすということは先ほどもご説明、それで学テとか、いい結果が出ているということのお話は言ったんですけど、併せて、思考力、判断力、表現力の部分も随分同様に伸ばしていただいているというところですが、それには 7 ページに「授業システム」について、概念と資質・能力が育つというところ、「概念と」という言葉が入っていて、これ結構こういうことを書かれているこういう難しい計画というのは珍しいなと思いました。多分、「概念と」という辺りと、思考力・判断力を伸ばしていくということとが一定結び付いているんじゃないかなというような気もするんですけども。その 2 点のことについては、どうでしょうか。

(山中教育長)

リーダーシップの関係でございますが、僕は調整型の改革派的なリーダーシップをとっていると自分自身を見ているんですけども、越知町の校長先生は、どちらかというと統

率的な改革的なリーダーシップに分類できるんじゃないかなと思います。やはり、急激に変えないといけない場合は統率的なリーダーシップというのは必要だと思います。ある一定、軌道に乗れば、どちらかという調整的なリーダーシップのほうがいいのではないかなと思います。やはり、私と校長先生とはバランスがいいのかなと。調整と統率ですので、両方でバランスがとれているのかなと思いますが、これが統率・統率になったり、調整・調整になったりすると、ちょっと動きが鈍くなったり、それから急激に変化をもたらしたりとか、いろんな問題が出てくるんじゃないかなと思いますが、そこら辺のバランス感覚はやっぱり必要かなとは思っております。また異動のときはそういったことも含めながら考えていかなくちやならないのかなとは思っています。

それから、もう一点、概念ということですが、これは校長先生の考え方です。やはり、僕らも思うのは、幼稚園とか保育園なんか見ても、幼児期の中から将来必要な算数とか国語とか、それから人間関係とかというものをどういうふうに育てるのと、作るのかというときに、どういう概念を小さいときから身に付けさせたらいいのかという考え方を持ったりするんですけれども、中学校の校長先生には、この中学校での概念ということについて、まだこれから使い始めたところだと思いますので、これはやっぱりしっかり僕らも勉強しながら、それから教員のほうとも共有しながら進めていかななくてはならないんじゃないかなと思っておりますが、やはり概念という部分をしっかり持つことが、これから創造的に考えたり、発展的に考える上では必要なことではないかなと思っております。昨日、今日と、東京学芸大学のほうに小中の先生が行っておりますが、やはり学芸大のほうでもIT教育の探究的な授業づくりというところを学ぶために行っておりますので、そういったこともこれから先、概念を育てるためにも役立てていきたいなと思っておりますのでございます。

(吉岡教頭)

この概念と資質・能力を育てる授業づくりということで、昨年から取り組んでいることは、具体の例としては、活用力を付けるためにパフォーマンステストというのを全教科で実施をしております。例えば先週、職員会で全員で確認したのは、社会科で「参勤交代とはどういうものか」ということで、今までの知識型の授業であれば、「何年に誰がこういうふうに制定して、こういう内容だった」と覚えて終わりなんですけど、それは概念ではない。参勤交代を制定することで、時代の背景的にどうしてそういうものが生まれたのか、そしてそれが行われたことで社会がどのように変わっていったのかというようなところがやっぱり概念として入ってないと、本当の資質が身に付いているとはいえないですよという話は話したところです。そういうふうに、全体を俯瞰した能力を育てるように、私は取り組んでおります。例えば社会科ですと、江戸時代について自分の考察、考えることをまとめてスピーチで発表しなさいというのを社会科のテストでパフォーマンステストとし

て実施を、今期末テストはやりますと言っておりましたが、やっぱり自分の思考、そしてどう判断し、どう表現するかっていうのを言語活動の充実ということを中心に、概念を教える、育てるというところで全教科がパフォーマンステストを実施をしています。それがこの「授業システム」の具体の中身になっております。

(尾崎知事)

どうも今日はありがとうございました。大変素晴らしいご講演で、本当にすごいですよね。算数、数学にしても、国語にしても、本当に急激に伸びてきていて、素晴らしいことだと思います。

最後の最後、本当は聞きたいことたくさんあるんですけど、お時間もないんで、一点だけ。11 ページですけど、「知識と実績について教職員が認める校長になるように努めること」という、この 11 ページのこれも全教員さんに配っているということですか。こういう形で、校長先生は「私はこういう校長になります」ということを宣言しているんですね。

(山中教育長)

そうですね。

(尾崎知事)

素晴らしいですね。

(山中教育長)

常々申しております。

(尾崎知事)

なるほど。それで、こういう形で、あえて、校長先生自分自身でみんなにこういうことを是非身に付けてもらいたいということを具体的に示しながら、併せて、自分はこうあるんだぞということも、また併せて示しておられるということですね。そこに素晴らしいリーダーシップがあるんですね。素晴らしいです。

本当にどうも今日はありがとうございました。

(司会)

それでは、教育長も教頭先生もありがとうございました。

次第では、この後、協議の時間を設けておりますけれども、大分約束の時間を超過させていただいておりますので、また次回、協議の時間を設けさせていただきますので、今日はその時間は割愛をさせていただきたいと思います。時間が押していて、大変恐縮でございます。

それでは、次回の日程についてお知らせをいたします。第2回の会議は、平成29年度上半期の取組の進捗状況と併せて、平成30年度、来年度の取組の方向性について議論できればと考えております。日程は、9月11日の月曜日を予定しておりますが、詳細は追って相談をさせていただきます。

それでは、以上をもちまして、第1回高知県総合教育会議を閉会いたします。皆様、どうもありがとうございました。

(尾崎知事)

はい、どうもありがとうございました。